

やまがら

ここで言う金太郎飴とは、あの美味しい棒飴のことではなく、似たり寄ったりで違いのないこと、画一的であることのとえのことである。ちなみに、英語のクッキーカッターも似たような意味のスラングらしい。

ぼくは若い時に、農水省 OB の某林業中央団体の理事長に、迷惑なことに、金太郎飴の作り方を叩き込まれた。あれは木造牛舎関係の報告書だった。各県の事例分析を何人かの研究員で手分けして書き、まとめる作業をしていた。今、林業雇用関連の報告書を作る仕事をしているけれど、そこでの各県の事例分析は、各研究者の書きたいように書いてもらっている。もちろん、いくつか触れてほしい話題のリストは事前に提示している。これが普通だ。しかし、牛舎報告書の方は、最後の推敲

の段階で、理事長から指導が入った。各県の事例の文章を全部揃えて、数値だけ入れ替えろと言うのだ。まさに金太郎飴ではないか。結局、理事長には従ったが、今後絶対に金太郎飴は作るまいと心に誓った。もちろん、食べる分にはよい。

それより少し前、院生の頃、林業界にも典型的な金太郎飴があることを知り、驚いた、というか、呆れた。市町村森林整備計画書。今では森林計画制度のマスタープランに位置付けられている、あの計画だ。文章のフォーマットがあって、数字だけ計算して当てはめていけば、計画書ができる。データ集めには必要な資料なので、九州中の計画書を集めたものだ。でも、読むのは苦痛だった。それから 10 数年後、この計画をマスタープランにするとの発表があった時、ウソだろって思った。金太郎飴はマスタープランになれるのか？ それからさらに

10 数年後、現代の市町村森林整備計画書はどうなっているか？ 市町村林政も進化したし、脱金太郎飴は果たせたのか？ ぼくは今、森林計画制度にあまり関心がないので、よく知らない。今度、どこかの計画書を見てみるか。

林業界には、もう一つ、金太郎飴があった。林業白書（現/森林・林業白書）だ。特に 1980～1990 年代。今の白書よりひと回り小さく、図表も事例・コラムも少なく、引用文献の明示などほとんどなかったし、何よりも文章がほぼ毎年同じで、数字だけ少しずつ変わるといって、まさに時間軸の金太郎飴だった。市町村森林整備計画書は空間軸の金太郎飴ということになるか。

1970 年代には毎年白書の論調の変化を分析した論考もあった。それなりにちゃんと作られていた証拠だ。

林業界の金太郎飴

それがいつの間にか金太郎飴になってしまった。なぜだろう。林野庁の怠慢だろう。しかし、2000 年代中頃に白書は大きく変わった。毎年テーマを変える特集章はあるし、図表も事例も脚注も充実している。2 章以降は毎年似たような文章だが、図表などが充実しているから、まあよいだろう。しかも、林野庁職員が積極的に説明会を開いてくれるし、大学に来てほしいと言うと丁寧な説明をしてくれる。だから、今では、学部 2 年生の授業で白書を輪読させている。留学生が研究室に来たら、最初の 1 年間は白書を音読させるというパワーゼミもやっている。森林・林業白書は金太郎飴から大学教材へ進化した。

林業界にはほかにもいろんな金太郎飴がありそうだ。例えば……。いや、金太郎飴は美味しいから好きだ。だけど、ここに書いたような金太郎飴はもう勘弁してほしい。（桜酒）